

ムハマディヤ研究集大成

インドネシア語で出版



ムハマディヤ本部で開かれた出版記念会に出席した中村氏

インドネシアのイスラム研究の第一人者である中村光男・千葉大学名誉教授(83)が、約100年間のムハマディヤ運動に関する研究をまとめたインドネシア語の本「Bulan Sabit Terbit di Atas Pohon Beringin」を出版した。中村氏は「イスラム世界と非イスラム世界の相互理解や共存を促進していくうえで、ムハマディヤの存在は極めて大きい」と強調する。(木村綾、写真も)

中村千葉大名誉教授

本は2012年にシンガポールで出版した英語の著書のインドネシア語版。ムハマディヤは1912年にジョクジャカルタで、イスラムの近代化を掲げる団体として発足、その後国内第2のイスラム団体へと成長した。中村氏は米コーネル大学在学中の1970年代以来、ジョクジャカルタ特別州コタグデに滞在して現地調査するなど研究を続け、同書では1910〜2010年のムハマディヤ

ムハマディヤ本部で開かれた出版記念会に出席した中村氏

ヤ運動についてまとめた。1970年当初のコタグデには二つしかなかったモスクが、2010年には約50に増えた。中村氏は長年のインドネシア研究を振り返り、「個人生活でも社会生活でもイスラムの実践が強調され、イスラム化が進行した」と分析する。災害や難民支援にも及ぶようになったムハマディヤ運動については「イスラムの立場からの人道的な社会福祉活動」と位置づける。

同書はムハマディヤ大学ジョクジャカルタ校が新設した出版局からの出版第1号で、ムハマディヤの機関誌スアラ・ムハマディヤとの共同出版となった。6日には、中央ジョカルタのムハマディヤ本部で出版記念会が開かれた。ムハマディヤのハエダル・ナシル議長も駆け付け、「この本を通じてムハマディヤ運動の歴史を読み返すことができる。われわれだけでなく、若い世代にとっても重要な本だ」と賛辞を贈った。

中村氏は現在のムハマディヤについて「有力組織の一つとして、インドネシアのイスラムを国際的に広めていこうとしている」と話す。今回の本も「特に海外に住むインドネシア人やマレーシア人、100人以上あるムハマディヤ大学の学生に向けて、出版したいという要請があった」という。同氏はことし、日本の文化勲章にあたる文化功労賞をインドネシア教育文化省から受賞、9月28日に同省で授賞式があった。同書の出版を含む、長年にわたるイスラム研究の功績が受賞理由の一つになった。同省

のロビーには現在、中村氏を含む受賞者47人を紹介するパネルが展示されている。活動は研究にとどまらない。昨年始まった、東南アジアの若手ムスリムを日本に招いて日本の青年との交流を促す国際交流基金のプログラム「東南アジア・ムスリム青年との対話」(TAMU)に携わるなど、イスラムと日本の相互理解促進にも力を入れていきたいとしている。

本の問い合わせはスアラ・ムハマディヤ(☎0274・376・955)へ。

噴火威力予想引き下げ

アグン山

国家防災庁(BNPB)は11日、噴火警戒が続くバリ島のアグン山が噴火した場合の威力について、火山爆発指数(VEI)の予測を当初の5から3(9段階で下から4番目の爆発規模)へ引き下げた。ドゥテックコムが報じた。

同指数は火山灰など噴出物の量で決まる。1100人が死亡する大惨事となった、1963年の前回噴火は指数5だった。今回も、当初は指数5と予測していたが、火山の観測結果などを受けて引き下げられた。同山の噴火警戒レベルは11日現在、最高の「アワス(避難準備)」を継続している。